

日展ニュース

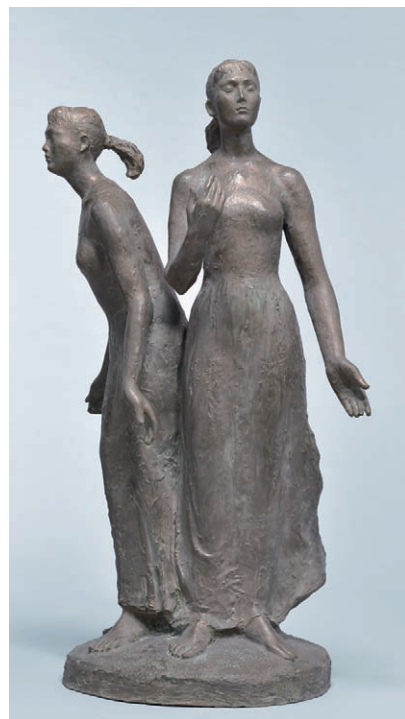
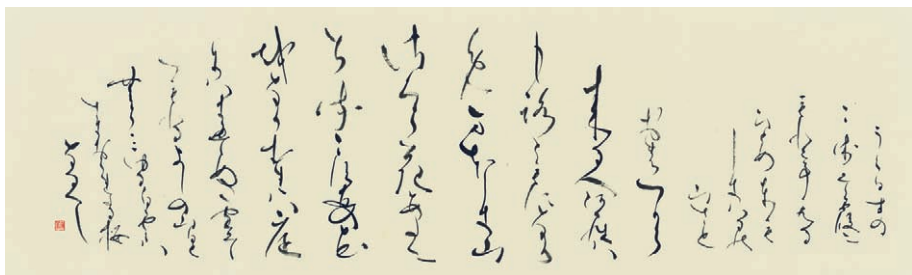
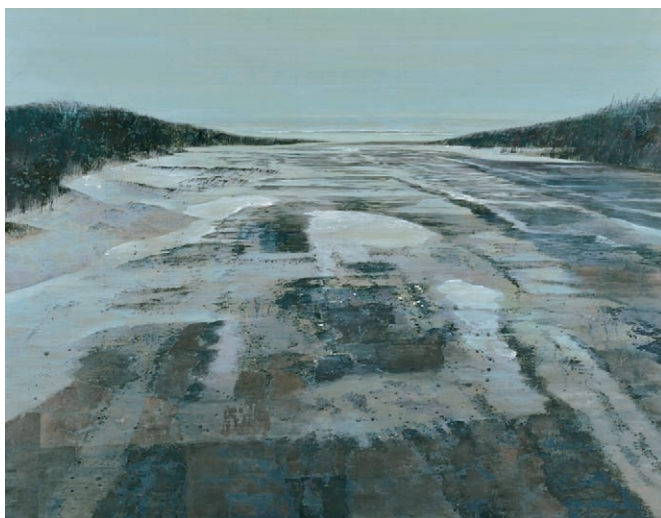
No. 180

<https://www.nitten.or.jp/> 令和4年1月30日発行

編集兼発行人 土屋 禮一



特集 第8回日展



第八回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 奥 田 小由女

令和四年新たな年、日展は明治四十年の文展から数えて今年は一一五年を迎えることになりました。

世界中が巻き込まれたコロナ禍の中、日展は、前回に続き休まず日展としての美と感動を発信し続けたいと第八回日展を開催致しました。密になる事を避ける為、会期中の行事は中止と致し、厳しい状況下で制作に取り組んだ日展五科、「日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書」の渾身の作品を社会に向けて発表する公募美術展として開催致しました。

永く続く暗い時代にこそ、芸術文化が大きな力として社会に必要な時なのです。

私達日展作家は、医療従事者に感謝を捧げながら、必ず明けゆく時を信じて、孤独と戦い本物の美を求め続け努力と精進を重ねています。

第八回日展は現在巡回展を開催中でございます。多くの方々に御高覧頂きたく、ご案内致します。

皆様の御理解と御協力を心よりお願い申し上げます。

第二〇二一年 日展受賞者一覧

大臣賞

| | | | |
|------|---------|----------|--------|
| 日本画 | 内閣総理大臣賞 | 海へ | 松崎十朗 |
| 洋画 | 内閣総理大臣賞 | DANCING | 北本雅己 |
| 彫刻 | 文部科学大臣賞 | duet | 工藤 潔 |
| 工芸美術 | 文部科学大臣賞 | 神の断崖2021 | 大樋 年雄 |
| 書 | 文部科学大臣賞 | さくら | 日比野 博鳳 |

東京都知事賞

| | | | |
|------|--------|---------|--------|
| 日本画 | 東京都知事賞 | めづる | 森 美樹 |
| 洋画 | 東京都知事賞 | 木もれ陽の森で | 大友 義博 |
| 彫刻 | 東京都知事賞 | 待て | 堀 龍太郎 |
| 工芸美術 | 東京都知事賞 | 記憶の渚 飾皿 | 尾 長 保 |
| 書 | 東京都知事賞 | 王僧孺詩 | 植 松 龍祥 |

日展会員賞

| | | | |
|------|-------|-------------|--------|
| 日本画 | 日展会員賞 | epoch'20-21 | 岩田 壮平 |
| 洋画 | 日展会員賞 | 瞬く | 福田 あさ子 |
| 彫刻 | 日展会員賞 | 清く | 榎野 仁一 |
| 工芸美術 | 日展会員賞 | 煌めく | 田中 照一 |
| 書 | 日展会員賞 | 珊瑚枝 | 尾西 正成 |

特選

第一科《日本画》

| | |
|------------|---------|
| 初夏の色 | 青野圭花 |
| 天空の森へ | 猪熊 佳子 |
| ひととき | 小 熊 香奈子 |
| 白 日 | 笠 川 武史 |
| Aluhi 8:49 | 榊 原 孔美子 |
| 斜 影 | 棚 町 宜弘 |
| 回 帰 | 福岡 正臣 |
| 道なき時代 | 前 川 和之 |
| 地球(ほ)クス集め | 村 山 春菜 |
| 月山弥陀ヶ原 | 山 田 まほ |

第二科《洋画》

| | |
|-----------|--------|
| こもれび | 内 海 洋江 |
| 微 睡 む | 大 木 基彰 |
| せりな嬢の肖像 | 大山 富夫 |
| 動 魂 | 春日 裕次 |
| the day | 久保 尚子 |
| 横浜夕景31・花火 | 小林 理恵 |
| 息 吹 き | 斎 藤 均 |
| 静謐・牧者の杖 | 永 山 秀男 |
| 牛骨と卓上 | 二宮 弘一 |
| 音 彩 | 早 崎 和代 |

第三科《彫刻》

| | |
|------------|--------|
| 風 | 菊 川 信一 |
| 光を求めて | 境 野 里朗 |
| たかい たかい | 境 野 里朗 |
| ゆく夏くる夏にエール | 田 村 晴江 |

COVID-19

| | |
|---------|---------|
| 場所 | 西沢 明比呂 |
| 畑仕事を終えて | 町 野 紗恭 |
| ヨルノムコウ | 丸 田 多賀美 |
| | 最 上 健 |

第四科《工芸美術》

| | |
|--------------|---------|
| 水 游 舞 | 井 上 絵美子 |
| 創生の記憶 | 織 田 定男 |
| 茜 さ す | 司 辻 健司 |
| 大地のスーベニア | 菊 池 房江 |
| 津軽・稔り輝く | 貴 田 洋子 |
| 大 地 | 郡 和 子 |
| 乱 流 | 小 島 泰明 |
| 明日に繋ぐ | 西 野 英史 |
| hymnal(讃美歌の) | 平 野 豊 |
| 青のsymphony | 山 崎 豊 |

第五科《書》

| | |
|--------|---------|
| 定家月のうた | 岩 井 秀樹 |
| 明星 上 | 大 田 鵬雨 |
| 多 聞 | 鹿 倉 碩齋 |
| 春 日 | 河 合 鷹山 |
| 李 商 隱 | 時 崎 五鳳 |
| 朝 川 渡 | 豊 原 睦子 |
| 微 風 | 西 村 大輔 |
| 白 川 の | 馬 場 紀行 |
| 蘭亭集詩より | 松 村 博峰 |
| 變 則 通 | 真 鍋 井 蛙 |

座談会

「ポストコロナ（コロナ禍後）」

―日展に求められるもの―

出席者

理事長 奥田 小由女

副理事長 事務局長 土屋 禮一

第一科 日本画 審査主任 福田 千恵

第二科 洋画 審査主任 湯山 俊久

第三科 彫刻 審査主任 能島 征二

第四科 工芸美術 審査主任 三田村 有純

第五科 書 審査主任 高木 聖雨

司会 西村 東軒

(日展ニュース委員)

令和3年11月12日(金)
於 国立新美術館 地下一階

審査室D



司会 本日、司会を担当させていただきます。日展ニュース委員会主任の西村東軒でございます。

今回のテーマは「ポストコロナ―日展に求められるもの―」でございます。テーマに入る前に、今年度審査の概況をお願いしたいと思います。

まず初めに、理事長の奥田先生より、全体的な観点からのお話をいただきますと思います。

今年度の審査の概況

奥田理事長 今日、皆さん、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

今回の第八回展は、まだコロナが完全に収束していないという中で、日展の美術、芸術を社会に発表していくという大きな意志のもとに、開催させていただくことになりました。

いろいろな行事が中止になるというとても厳しい状況の中、出品を断念した方が、結構いらっしゃるようです。ご迷惑をおかけしますが、概ね皆さん頑張ってお出ししてくださったと思います。鑑審査も無事終わって、とてもいい審査ができたのではないかなと思っております。

奥田 小由女



日展を開会することができて、展覧会が本日まで無事に進んでおり、ほっとしているところでございます。

司会 続きまして、副理事長の土屋先生、事務局長としてのお立場から、五科全体を見ていただいた感想などをお願いしたいと思います。

土屋事務局長 今回、去年に続いて開会式も懇親会もなく、これは本当に残念なことでありましたが、コロナ禍の中で、世間の常識、美術館側の要望だとか決まりなどを、注意深く丁寧に事務局の方々が対応していただいたおかげで、審査も無事終わり展覧会に持ち込むことができました。

地方の学校の先生方は、県内を出るとか、上京するにおいて、想像以上に難しい規制があったとい

うことも知りました。そういう中で、皆さん協力のもと、無事ここまで来られたのは、ありがたいと思っています。

搬入点数ですが、今回はたしか五点、少なくなつたぐらいで、こういう時期でもあるのに、創作意欲というのは変わらないのだなと、とても喜ばしく思いました。

例年そうなのですが、書の広い部屋はいつもながら僕は魅力的だなと思つて。

見る側もあの部屋は印象深し、緊張感はきつと先生方の制作意欲にもつながつていてこれは大事な

ことだと思ひました。

工芸のほうも、部屋に入つた時の作品の引力によつて、空間が広がつていくところがとても印象深く。これから審査のご苦労を伺うわけですが、今後の会場の作り方、見せ方というようなことにもお話が進むとありがたいと思つています。

司会 続きまして、審査主任をされた各科の先生方に、鑑審査の方針や状況、作品傾向、次回展に向けて出品者に伝えたいことなどに関して、お話を伺いたいと思います。

それでは、日本画の福田先生お願いいたします。

福田 日本画のほうは三日間かけて審査をさせていただきました。感染症対策のため、審査の会場でも、ソーシャルディスタンスをとりました。

搬入点数ですが、コロナ禍の前から比べると、ちよつと少なくなりましたが、皆さんの心というものを大切に、丁寧に鑑審査をさせていただきました。

日展という一〇〇年以上続いた会ですので、大変厳しい審査の仕方を見せていただきました。

その結果、無事に見応えのある作品は全部きちんと入っていると

思っております。

今年、新入選は一二点でしたが、今回は間違いなくよく描いているというか、心を込めて、感性も深めて、作品を出しています。それは素晴らしいことなのですが、ただ何か次の日展のために向かつていく元気がちよつとなかったかなというのが、私の感じたところです。

司会 洋画の湯山先生、お願いいたします。

湯山 日展洋画は、総搬入数が一六〇四点、このコロナ禍でどれだけの人が応募してくれるだろうかとちよつと不安に思つていたのでございますが、昨年に比べますと、若干少なうはりましたが、例年並みの応募者があつたということ、まずはほつとしましたし、頑張つて出品してくれた皆さんには、感謝したいと思つております。

鑑審査の詳細にしましては、もう少し削つて厳しくしましょうかと、審査員の皆さんに諮つたのでございますが、ほとんどの審査員の方々が、このコロナ禍、いろいろなイベントが中止になったり、暗いイメージの中で、入選者が増えることで士気が高まるのではないでしようかというご意見が多

かつたものですから、例年よりは少し増えております。

そのかわり、展示は非常に苦勞いたしました。会場を見ていただけるとわかるのですが、二段掛けの部屋が結構あり、展示された後の会場を見てみますと、少々窮屈な感もあるのですが、不思議と逆に活気のようなものを感じる展示になっておりました。そういった意味で、いい悪いだけではなく、作家の熱といいますか、気概といったものが作品を通して会場全体に伝わつてきているのではないかなと思ひます。



湯山 俊久



特選に関しましては、外部審査員のお二人、大阪市立美術館の篠館長と東京ステーションギャラリーの冨田館長にも、忌憚のない意見をいただき、最終的には一〇名に絞り込んだということでございます。いい審査ができたのではないかなと思っております。

次の世代のためにもという、そんな願いを込めての審査でございます。

司会 彫刻の能島先生、お願いいたします。

能島 今年の審査員や、実施を決めた時は、実際は昨年よりもコロナの感染者が五〇〇〇人以上でした。果たして日展開催できるのかと思っていたのですが、減少傾向で開催できたということです。作家というのは、一生懸命作品をつくっても、それを発表しないと

一年が無駄になってしまう。日展が開催できるということは、作家にとっては本当にありがたいことで、自分の作品を多くのの人に見てもらい、「ああ、作品、いいね」と言っていたら、社会貢献もできます。

彫刻の場合、コロナ禍の影響を非常に受けております。まず、大学がリモート授業になり、制作の場所が使えない。大学で一番制作できる時にできないというお話が随分ございました。それで搬入数がうんと減るかと思ったら、さほどじゃなく、昨年並みになりました。

彫刻というのは作品が大きいものですから、審査の時に一堂に並べることができません。とにかく二点から一五点、全部台の上に載せてもらって、しかも立体でございいますので、正面だけというわけにいきません。審査員全員に一回ぐるっと全体を見ていただき、一人一人の審査員の彫刻観に基づき、堂々と厳正に審査をいたしました。

会場を見てわかりますように、今年は点数が少し減ったせいか、彫刻は非常にいい会場になったな、陳列がうまくいったなと思っております。

特選につきましては、他の科と違って、出品点数が減っていますので、昨年は八点、今年も八点到いたしました。全員の審査員が責任を持って、全作品を選別していただきましたので、かなりいいレベルの作品が特選になったと思います。それから、日展というのは全国規模の展覧会でございますので、全国から作品が集まるということで、やはり地域性、みたいなものがございいます。結果的には各地に、特選が出ました。

司会 工芸美術の三田村先生、お願いいたします。

三田村 工芸美術は、平面作品の応募が五点増えました。ただ、立体が三八点減ったということで、昨年からは三三点のマイナスということでございます。

審査に入る前に、私たち一七人



三田村 有純

工芸美術会場



の審査員が集まりまして、お互いの持っている工芸論、工芸美術をどういうふうな方向性にするかということについて、話し合いをすることから始めました。

外部審査員お二人の先生にも加わっていただき、そのことにより、審査員十九人の持つ思いの違いを確認することができました。審査は、背景となるものを含めて、情報がありません。作品を見るのみ。その作品をきちんと見て、先生たちに審査していただくということをしてまいりました。

工芸の作品というのは、近くで

見て、どのような芸術表現をしているかということも重要なことです。立体的場合は、作品の並んでいる側で見ていただくということをして、それから少し離れたところから、一点一点審査をしてきました。

とにかく、それぞれの持っている美意識、審美眼、哲学をもって、会場に飾っていかどうか、考えながら審査をしました。結果的には、立体は昨年より五点少なく、平面は一点少ない結果でございました。

特選についてですが、工芸とい



密を避けての講堂でのイベント

うのはいろいろな素材がございましたが、さまざまな表現のものを選ぶことができました。また、今年は各地域にバランスよく選ばれました。

それから、係主任の相武先生とご相談し、日展の工芸美術の空間をどうやって美しく見せようかということと話し合い、入ってすぐに見渡せるようにしたいと間仕切りを移動しました、広い空間でどういうふうに見えるかということを考えました。

あとは、展示台の工夫を行いました。雛壇型にすることによって、ちよūdお雛様が並んでいるように見えるということを行いました。

入選した作品は全てが素晴らしい、その作品を私たちが預かりして、舞台の上でどうやって輝かせるか、それが審査員の仕事です、ということを私は申し上げました。

一室から十室まで会場全体を見ていただいて、ああ、日展の工芸美術はこうなのだということが見えるようになっていたのではないかなと思います。

司会 書の高木先生、お願いいたします。

高木 今年、書の多くの公募展が開催されましたが、各公募展

大幅な出品減ということになって、この状態で日展は果たして数字が維持できるであろうかという心配をかなりいたしました。そういう面では、昨年よりも八七点増ということになりました、これは本当に日展に対する情熱であるとか、一度日展に入選したいという希望を持った方がたくさんいらっしゃるって、こういう数字をいただけたのではないかなと思っています。

それから、審査に関してでございますが、審査は大変苦しくて、皆さんが非常に情熱を持って出品された作品から、エネルギーが出ているというか、気持ち審査員に伝わってくる。熟練を重ねた実力ある作品、それから書道はよく古典をベースに言うのですけれども、古典の香りがする作品と、現代感覚に優れた作品、大きな三つの作風がはっきり見ることができたのですが、作家自身の気持ち伝わってくるので、審査員一同、大変な苦労をされたと思います。

いい作品を選ぶということで、審査員の先生に自由に発言していただいて、これは本当にいい作品ですから、残しましょうと。先生方のご意見を拝聴するというスタンスは、しっかりとつたつもりで

ございます。

結果的に、一〇八三点の入選を決めさせていただきました。入った作品は、非常に光り輝く作品ばかりで、いい審査ができたのではないかなと思っています。

それから、特選に関してでございますが、基本的には話し合いを何度も繰り返し、最終的に一〇点を決定させていただくことになりました。

それから、陳列についてでございますが、まず、土屋先生、お褒めをいただき、ありがとうございます。あの部屋は広々と全体が俯瞰できるように、しかも作品は公募の出品作よりも大きいので、かなりインパクトがある部屋になり、我々も成功した陳列だなと思っています。



高木 聖雨



また、陳列の時には、隣に同じ作風の作品がないかななどの注意をしながら、審査員全員で会場内を回って、それぞれ個々の作品が光り輝くように留意しました。

今回の書は八七点増えました。

実は、書道界は六年ほど前から、世界のユネスコ無形文化遺産登録という目的の運動を継続しており、そのためにさまざまな普及活動に努めてまいりました。つい先日、文化庁より登録無形文化財に書が登録されましたが、こういう地道な運動が必要なのかなということ、を今回つくづく感じさせていただ

きました。

司会 先ほどからのお話の中にも、鑑審査での工夫とか、ご苦労とか、出てまいりましたが、補足的に、その他特筆すべき事柄とか、来年を目指す出品者に対して何か伝えたいことなどがございましたら、ご発言をお願いしたいと思います。

福田 今回、審査員は三〇代後半から七〇代後半まで、五世代が審査員に選ばれているものですから、見方も幅広く、すごくよかったですと思うしております。もちろん、審査員を決める段階でそういうことまで現在工夫をしております。次の世代を育てるためにも必要なことではないかと思っております。

陳列は、昨年とは変わらない状態でございますが、見応えのあるのはそのまま継続ということも大事なことなので、そのようにさせていただきます。

司会 奥田先生から、今までのお話の中で、感想をいただければと思います。

奥田理事長 五科それぞれ個性が非常に違う科が、一堂に会して、同じ時期に日展という大きな事業を行うわけですから、これは大変なことだと思うのですね。でも、一科から五科それぞれの事情があ

りますので、それを先生方が非常に熟知されて、その中で最大限にいいものを選び出すという方法が、完全によくいっているのではないかなと思います。

今回、私は工芸ですので、工芸をよく見ましたが、特選はこれからの日展の形を示唆するものでもありますので、特選を選ぶというのは難しいことなのですけれども、作品が選び抜かれていく中で、非常にいいものが本当に厳しく選ばれているという実感がいたしました。

一番大変だと思うのは書道のあのすごい搬入数ですね。書のある方にお聞きしましたら、日展に出すということだけで勉強する意欲が湧いて、何百枚も書くというその努力をすることが、ものすごく貴重なので、まず挑戦するということが大事なのだというお話を伺ったことがございました。各科いろいろな事情がある中で、本当に見事に選んでいただきました。それぞれ、同じ形ではないのですけれども日展をどうやったらよりよくするか、それは審査員の審美眼にかかっているわけです。全体を見て、そういう点が今回は非常にすばらしく行き届いているように見受けました。



司会 前半の討論はここまでになります。事務局長の土屋先生から、前半のまとめとしてのご感想をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

土屋事務局長 外部審査員の先生方の話ですが、日展の審査の公平性、透明性を大切にするために、入っていただき、日展のためにも貢献されております。私も、審査に出ない時は、監査役で立ち会っております。外部審査員の先生方との相乗効果により、よりよい審査ができていっているのではないかと思います。



それと、先生方は、コロナ禍の中、一点でも多く入れたいけれども、会場づくりも大事にしたいということ、最後まで絶えず話し合いをするのは、大事なことだと改めて思いました。

私、昨日、寝る前に偶然、ニュースで瀬戸内寂聴さんが亡くなったと知りました。九九歳ですか。その時ありし日の恋多き女性だった寂聴さんの言葉が出てきて、「世界で一人だけの私が、世界で一人だけの人に会おうんだから、それは恋しちゃうわよ。世界で一人だけ嫌な人に会おうんだから、絶対嫌いになるわよ」という話、僕、なるほどなと。

我々の審査も同じことだと改めて思いました。これからの日展を考えた上では、やはり世界で一人だけの人間が世界で一つだけの

作品を選んでいかなければいけない。

司会 それでは、後半に移らせていただきます。

コロナ感染者は、拡大、縮小を繰り返して、世の中全体が振り回されてきた二年であったように思っております。後半は、ポストコロナにおいて、日展に求められるものとは何かという視点でお話をいただければと思います。現状を鑑みますと、ウィズコロナということになるかもしれません。そういった中で、日展に期待を持つ方々に対して示せる形は何かとい



授賞式での都倉文化庁長官

ったようなこと、特に前向きで明るい展望が感じられるお話が伺えたらと思っております。

奥田先生からお願いいたします。

ポストコロナ

日展に求められるもの

奥田理事長 厳しい時代が続いたわけですが、気持ちとしては、これから必ず明けていくのだという思いを持ちながら、努力してきたわけです。振り返りますと、これだけ二年間、全てのイベントが中止になりますと、全く人との接触もなく、閉ざされて、ほとんど日展から離れていく人も出てまいりました。しかも、出品はしたけれども、地方の人は日展を見にこれないという状態が、第七回展の時はかなり多くございましたね。ですから、何とかWeb上でも作品を皆さんに見ていただきたいということをやりました。

今度、八回展になりますと更に、深刻になってきて、一旦、日展から離れてしまうと、何となく情熱が続かなくなってしまうとか、そういう悩みをたくさん寄せられるようになってきました。何とか励ましていきたいと思うので、これから

だんだんと明けていきましたら、状況を見ながらできるだけ作家同士が交流する機会を作れたらいいなと思います。

徐々に従来の形を取り戻していきたいと、私自身は希望しております。

司会 今、奥田先生からの発言がございましたが、それを受けて、先生方にお話をいただければと思います。

日本画の福田先生からお願いいたします。

福田 今回の日展でキャプションの横にQRコードがついておりますね。あれは若い人たちから大変評判がいいですね。QRコードからその方のホームページも見られるというようなところまでつなげてくださったら、もつとありがたいというご意見をいただきました



福田 千恵



した。

今回の座談会のために、若い方にいろいろなお話を聞く機会を持ちました。今の若い人たちは、このコロナということに関係なくテレビも余り見なくなったというので、SNSなどを日展として更に強化していただけたらありがたいという、お話でございました。

現実には、美術関係の大学で、日本画の制作過程などを学生に、Zoomを使って見せているのだと思うのですが、今の方たちにとっては、対面授業も素晴らしいと思うけれども、リモートでも参加で

き、分かりやすく教えてくれるのはすごくいいって言われて。現実には大学で何か所かやっていらっしゃる。映像を映しながら、学生たちに半分遊びのような感じで見せて、動物園に行つてスケッチしているところからとか、そういうのもやっているんですね。ですから、日展として何かやってくださったら、きつと見ると思いますというの、若者たちの考え方のようですね。

こういうのも工夫次第で取り入れてもいいのではないかなと思います。

司会 SNSの活用とか、今、新しい話が出ましたが、そういったことを含めて、洋画の湯山先生、何か……。

湯山 コロナに関しましては、私は、東京や都会の人たちの感覚と、地方の人たちの感覚で、やはりずれがいろいろあるのではないかなと思っています。もちろん感染症対策をし、「無理はしないでください」というただし書きの上、参加できるような形に持っていってほしい、土気も高まるし、いいのではないかなと、そのように思っております。

先日、美術館で土屋先生とエレベーターのところでお会いしまし

て、中学生だと思ふのですが、制服を着た団体の人たちがずらっと並んで、指導者の方の注意事項や説明を聞いていました。ちょうど同時に開催中の企画展もありましたので、そちらとあわせて日展もこれから見ようという状況だったのだらうと思うのですが、土屋先生と、「ああ、いいね。ああいうふうに団体の人たちがいるのは久しぶりですね。」というお話をしました。

私も以前、東京都美術館で日展開催の時は、よく地下のロビーのところまで修学旅行の学生だとか、そういう人たちがわいわいと整列してにぎわっていた姿を時々思い浮かべるのですが、これからの日展もああいうふうにならないものかなと常々思っております。学校の先生方や、サークルの指導者にもっと日展を見ていただきたいというアピールをもうちょっと積極的にしてもいいのではないかな。これからの非常に大事な課題ではないかと思っております。

司会 それでは、彫刻の能島先生、お願いいたします。

能島 私、今日は、午前中早くから、会場を見てまいりました。日展の審査所感にも書きました



能島 征二

が、日展は今年で一四四年になります。その草創期より、日展の彫刻は絶えず具象表現を求めて、各作家がお互いに技術を磨きながら、各作家の多様な具象表現を重視しながら、高い品性、感性、造形性、こういうのを求めてきましたが、洋画の湯山先生も日本画の福田先生も、審査所感に日展のアカデミズムの大事なことをちらっと触れております。やはり具象表現の再確認。これはほかの公募展にはないことで、特に絵画、彫刻は、昔から言うフライングアート、純粹美術でそれはずっと私たちの先輩から今日まで受け継いできた重要な表現だと思えます。

今回の彫刻の審査に当たっても、一人一人の具象彫刻の多様性を認めつつ、自分の形を求めつつ、皆さん頑張っているのだなという思

いがしたものですから。日本画も洋画も見えていただくと、ああ、みんなそうなのだな。そういう理念といえますか、やはり日展の作品というのはそういうことなのかと。

今、大学でも、現代美術とか、余りに多様な表現を認め合って、いわゆる具象の表現をちゃんと教えるところが少ない。しっかりと具象彫刻の先生がいると、ちゃんとそこで作家が生まれるのです。そういうところをもう一回きちつとしていかないと、本当に具象的な表現をする作家がだんだんいなくなってしまう。これは日展が今



彫刻会場

まで一四年もかかって一生懸命やっているわけです。そういうことを今回しみじみと感じた次第です。

具象彫刻の大切さ、具象絵画の大切さ、これを日展が推し進めて、そういうのをリスpektしながら進めていきたいということ、特にコロナのこういう時代を感じました。

出品作家も、特に会員ですが、表に出られない分、本当に一生懸命こつこつと自分のアトリエで作品をつくって、今回発表していると思います。そういう感じを受けたものですから、具象彫刻、具象絵画の重要性を再認識した次第でございます。

それから、報道のことですが、いわゆる三大紙には昔は必ず日展の批評が出ていて、それを皆さんに読んでもらっていた。その上で、日展を見にきたのですが、今はほとんど公募展は書かなくなりました。私は茨城ですが、茨城新聞は、毎年、日展の記事は大きく載せております。

作家が一生懸命新聞社に日展を取り上げてくれるようアプローチをして、記事にしてもらおう。そういう努力をお互いにすれば、もつと日展の記事が載ると思いますよ。

実際、茨城新聞はやっていますから。ほかの新聞のことは私はちよつとわかりませんが。黙っていちやダメですね。作家も一生懸命動かないと。そういう感じを持ちました。

司会 先ほどから、SNSだとか、どういうふうの日展を知っていたかどうかということが、ご意見として、またお話として出ているようです。工芸美術の三田村先生、何かお話をいただければと思います。

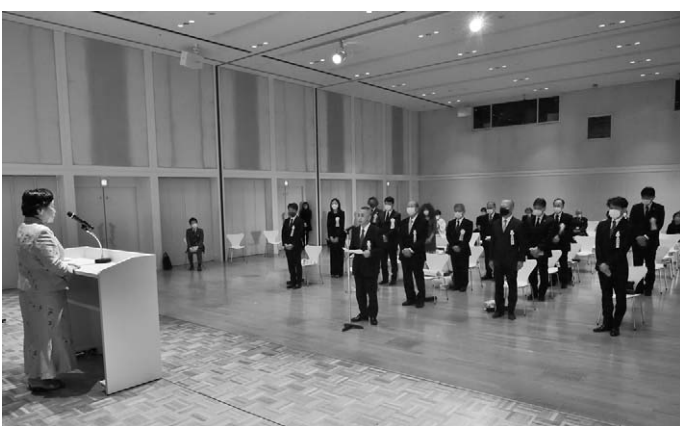
三田村 実は今日、午前中、能島先生が工芸の会場に来ていただきました。とても丁寧に見ていたでいて、「この作家、茨城だよ」と、茨城の作品、全部先生は覚えていらつしやいまして、僕、この五科あるという意味が、実はここにあるのではないかなと思っております。

今年は日展の巡回展が京都、名古屋、大阪、安曇野、金沢で開催を予定しております。それ以外にも、各地域でそれぞれが、活動しております。それを含めて、日展の中に、県別の連携するような全科の組織をぜひつくり上げていただきたいと思います。

工芸では、四七都道府県で入選がゼロだったところが三つあるの

ですね。宮城と島根、沖縄がゼロだった。あとは全部ある。今年、台湾からも入選が一点ありました。やはり日本の五科ある芸術運動体としては、四七都道府県に何らかの形で組織をつくりながら、今後の日展の組織を広げていくことができればというふうに思っています。

私たち作家は物づくりで、大勢の人と出会って、作品の前で語り合って、そして切磋琢磨していく。全科の作品を私たちは同じように勉強させていただくというのが、



二部制にし、出席者の人数を制限しての授賞式

日展の大きな力であると思います。
今年は会場に若い方の姿が目につくようになりました。告知の方法としてSNSなどを使うべき時が来たと思います。ここにどういった情報を流すかということが試されている時代であると思いますので、「日展」という文字がこの秋の時期にどんなところで目につくか。そういうSNSの活用を含めて、若い人たちと一緒に日展を盛り上げていきたいと思っています。

司会 それでは、書の高木先生、お願いいたします。

高木 若い方はほとんど日展情報でSNSから仕入れて、日展に興味を持って、それで出品をしていただくという、大きな媒体だと思います。

ネットで作品を見るということも大切ですけれども、会場に足を運んでいただいて、優秀な作家や会員の先生方の作品を見て、その作品から湧き出る気というものを感じ取っていただき、しかもそういう気は部屋中に充満していますし、それによって非常に気分をよくして家に帰っていただけるということがあると思います。

文物が発する気というのを、僕は信じておりまして、そういう環境の中に入り込むというのは、非

常に重要なことだと思っていますので、多くの入場者に入っていたくような努力、これをもっともつとやらなければいけないと思います。

司会 それでは、時間も押しておりますので、先生方のお話を受けて、奥田先生のほうから、感想がございましたら、一言お願いいたします。

奥田理事長 先ほど学生団体のお話がありましたが、私の記憶では、若いころは、昭和女子大の理事長が毎年、生徒をたくさん連れていらしたり、とても熱心な学校があったり、大勢の人が来ていました。

今、作家として活動している方の中にも、両親に連れられて日展で、生の作品を見て、子どもながらに感動して、いつの間にか日展の作家になってしまったという作家の方がたくさんいらっしゃると思いますが、今、本当に若い人がなかなかいらしていただけない。皆さんが命がけで書いた絵とか作品を、会場に来て実際に見ていただきたい。

そこで一点でも感動を覚えたり、影響を与えることができたりする作品に出会われたら、本当に私たちは幸せなことだと思いますので、

魅力ある日展をどうやってつくるかということが、これからの大きな課題だと思います。

だからこそ、皆さんが情熱を持つてつくったものを、直接、会場でどのように大勢の方に生のものを見ていただくかということを、これからいろいろな面で考えていきたいと思っています。

そういう意味で、自分たちが精いっぱい精魂込めた作品を社会に意義のあるものとして発表できたら、日展の価値が非常に高くなるのではないかと思いますので、その辺、先生方にもこれから考えていただいて、努力をしていただきたいと思っています。

司会 最後になりますが、今日の座談会を通して、全般的な感想とまとめを土屋先生にお願いします。

土屋事務局長 今の奥田先生の話に尽きると思いますが、この座談会、ますます内容のあるものになってきて、本当に感謝しております。

僕が昔、とっても印象深く読んだ本があって、それは美術館の役割の話でした。きつと近く人間を救うのは、教会でもなければ、哲学者の理屈でもない時代に突入するだろう。ただ、美術館だけは、

作品は見る人の鏡みたいなもので、自分に会う場所でもあり、新たな自分を発見する場所でもあり、自分の心を癒してくれる場所でもある。美術館の役目は何て大切なのだという話を思い出したのですが、私達の日展もそういう役割の一端を担っているはずですよ。

私達の自覚とともに若い次の世代にこそ会場に足を運んでもらい、日展をみてもらいたいと思います。

今日は皆さん、本当にありがとうございました。有意義な会になったと思っております。

司会 土屋先生、ありがとうございます。

これで座談会を終了させていただきます。



司会 西村 東軒
(おわり)

外部審査員より

日展日本画の審査にあたって

(第一科日本画 外部審査員) 潮江 宏三

外部審査員として日本画の審査に当たるのは、京都市美術館館長在任中の機会以来、二度目のことになる。筆者は、日本画の世界は確実に変化の時を迎えていると日頃から感じていることもあって、今回も、新しい芽を見つけ出し、それを展観に繋げようと秘かに思いつて鑑査に臨んだ。けれど、結果的には、変化の気配を一部しか取り入れることができず、特選作品に見られるように、描写力が表に出た、堅実な選択となつてしまった。力量が量られたからとはいえ、少しさびしくはあった。日本絵画の真髄である、描写力を乗りこなした装飾性の新たな境地にも出会えなかったが、それは叶わなかった。

日を改めた大臣賞、都知事賞、会員賞の審査の日は、入選作品を含む全作品が展示されているのを拝見したが、その際には、正直なところ、かつての錚々たる方々の作品が欠けていることの寂しさが先に立ってしまった。とは言いつつも、力のある後継者が育っていることも目の当たりにして安堵もした。三賞の審査では、投票によって候補を絞り込み、その後その候補について、実に率直な意見交換をすることができた。二人の外部審査員に発言を促され、その意見にしっかりと耳を傾けていただいたことは、改革以後の審査会のめざすべき姿勢の如実な表われだと好ましく思った。

また、大臣賞、都知事賞は、今回の出品作の中

潮江 宏三（しおえ こうぞう）

での実力本位の選考になつたと思うが、会員賞に関して、選択の対象こそ異なつたが、日本画の新しい在り方を推賞する意図を込めたいとされた姿勢には、大いに共感するところがあった。鑑査、表彰は、勿論個々の成果の評価だが、未来に向けての投企をこめることも必要なのだと思う。

現在、京都市立芸術大学名誉教授。美術評論家。美術史家。



一九四七年香川県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学。博士(文学)。京都市立芸術大学教授、学長。京都市美術館館長。

日展洋画部審査雑感 技術を超えた何か

(第二科洋画 外部審査員) 富田 章

毎年、日展の会場を見るたびに思う。これだけ多くの人が、絵を描くことに費やした熱量の大きさを。一点一点にどれほどの苦しみや喜びが込められていることか。

今回審査を経験して思ったのは、日展会場に並べられた作品の熱量が、実は一部に過ぎなかった、という当たり前の事柄だ。応募作品の約六割が落選するのだ。今回の洋画部門は、一六〇四点の出品に対し、六二五点が入選した。入選しなかった作品の熱量が低かったわけではない。どの作品も真摯に絵画と向き合い、地道な努力の積み重ねによって生み出されたものだろう、その熱量は凄まじいものがあった。

審査とは、その熱量を引き受けることにほかならない。入選の審査に四日間、特選と賞の審査に二日間という日程は、想像した以上に過酷で困難なものだった。目の前を短時間で通り過ぎていく膨大な作品群の一点一点に瞬時に判定を下していくのだ。少しづつ絞り込みながら、それが二度、三度と繰り返されていく。余分なことを考える暇はない。これまでの自分自身の眼の経験だけで立ち向かうしかない。

私が強く惹かれた作品が落選することもある。それは合同審査なのだから致し方ない。判断の基準が審査員ごとに異なるのは当然のことだ。当落の境目は非常に微妙なものであったと思う。

富田 章（とみた あきら）

日展という、日本の美術アカデミズムの頂点をなす団体であるだけに、技術面ではさすがに優れた作品が多かった。だがそれだけでは作品は成立しない。それ以上の何かを感じさせるかどうか、私自身の判断基準であり、そのことには忠実に職責をこなしつつありである。



一九五八年新潟県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。成城大学大学院文学研究科修了。財団法人そごう美術館、サントリーミュージアム「天保山」を経て、現在、東京ステーションギャラリー館長。

新たな具象表現を見る。

(第三科彫刻 外部審査員) 守屋 正彦

第三科彫刻は文部省美術展覧会以来の、明治初期のイタリア人教師ラグーザからはじまるギリシア・ローマの理想的な人体を希求し、その伝統を継承して、具象表現を墨守してきた感がある。抽象表現や時代の趨勢に流されない性向に特徴がある。したがって、日展への応募作品の多くは奇をてらうことなく、自身の造形精神、造像の技術を作品に込め、出品して評価を得るのである。

総点数は二一七点。うち、一般からの応募は八八点。入選数は六四点、新入選は三点であった。入選作品を見ると石膏像が多く、それに木彫、テラコッタなど多様な材質であった。傾向としては純粹の裸婦像は少なくなり、日常の姿、着衣や歴史上の人物、聖なる偶像など、さまざまな表現が見られるようになった。

外部審査員として参加した感想としては、文部科学大臣賞、東京都知事賞、日展会員賞、それに一般からの特選も大変欲得のすばらしいものであった。最近の傾向としての、SDGsを反映し、感染症や人類愛などをテーマとした作品も見られるようになった。おそらく、単に具象を技術的に見せるものではなく、コロナ禍で感ずるところを表現した。世界的な感染の災厄が具象の新生面、その扉を開いたのではないかと思う。

守屋 正彦 (もりや まさひこ)

AI時代とはいえ、存在の重量も、肌合いも、空気感も、風や光さえも、三次元を一瞬にして、身体的感覚で把握できる人間の視覚は、そう簡単にとつてかわるものではない。

彫刻家が造物主のようにクリエイティブする、その造形精神は尊重するべきものであろう。今回の展覧では多様で新たな具象表現が見られた。日展彫刻の伝統と革新を改めて感ずることができた。



一九五二年山梨県生まれ。東京教育大学(現・筑波大学)大学院修了、博士(芸術学)。

山梨県立美術館学芸課長を経て、

筑波大学教授。現在、山梨県立博物館館長、太田記念美術館理事、筑波大学名誉教授。著書に『すぐわかる日本の仏教美術』『すぐわかる日本の絵画』(東京美術)など。

出身地の文化的古層

(第四科工芸美術 外部審査員) 樋田 豊郎

今回の審査でつよく感じたのは「熱気」だった。審査にあたられた三田村有純主任そして日展会員の方々には、日展工芸への来場者数を増加させ、そのためには現代社会の感性を取り込まなければならぬという意欲が溢れていた。その熱気にあてられ、もうひとりの外部審査員である練馬区立美術館の秋元雄史館長も私も、これからの日展工芸について深く考えることとなった。

そうした将来の方向性について、私もいくつか思うところがあった。なかでもつよく思ったのは、応募者の方々にもっとご自分の文化的背景を、作品に出してほしいというものだった。応募作をよく見ると、作者が住んでいる地域の暮らしや風情が感じ取れる作品もあったが、多くはそうした要素をあえて拭い去っている作品だった。いわば芸術表現のグローバル化が、工芸の分野でも見られた。青森から応募された作品も、沖縄からのそれも、使われている材料や技法に違いはあっても、表現されている芸術的感興(ファンタジー)は通底していた。

それが近代工芸というものかもしれない。しかし私としては、作者が血肉化している生まれ育った地域の文化的古層から、制作の養分を吸い取っている作品が出てきてほしいと思った。そうした作品の増加が、日展工芸に多様性をもたらす、展示会場の雰囲気を変え、来場者の目を惹きつけることにつながると思つた。

応募者が作品に地域性を出したからといって、日展工芸が空中分解する心配はない。オリンピックと同じだ。日展工芸も地域文化の競い合いがあつてこそ求心力を増すだろう。特選のひとつに、津軽のこぎんに触発された作品のあつたことに新しい方向性を見た。



樋田 豊郎 (ひだ とろう)

一九五〇年東京幡ヶ谷に生まれる。東京藝術大学大学院(芸術学)修了。

東京国立近代美術館工芸館学芸員、秋田公立美

術大学理事長、及び学長を経て現在、東京都庭園美術館館長。

企画した展覧会「素材の領分」で倫理美術奨励賞受賞。編著書に、『明治の輸出工芸図案』、『工芸の領分』、『近代日本デザイン史』、『工芸のコンポジション』ほか多数。

日展の意義と審査

(第五科書 外部審査員) 島谷 弘幸

日展は、日本の美術界を牽引する展覧会であり、現代を代表するアーティストの最高峰と言つて過言ではない。出品者により、多くの美術を楽しむ方々に芸術の一大イベントを提供している。

ところで、博物館に所蔵する文化財は、何世代もの多くの人々の篤い思いによって、今日まで大切に伝えられてきた。博物館は、文化財の保存と活用が使命であり、何より、次の世代にこれらを確実にバトントッチすることが大切な仕事である。この文化財は、各時代における現代アートなのである。つまり、日展は、現代を代表する作品を選んでいるとも言える。

日展の第五科は狭き門である。今年は昨年比して八十七点の増加となり、応募総数八五一点で、第五科への憧れがさらに大きくなったことが窺われる。技術の習得や名品鑑賞による美意識の醸成、つまりは手習いと目習いによる表現力を養う日々の努力があつて、ようやく出品に至る。この裾野の広がりには山の高さに繋がることになるので、書壇関係者の努力に感謝したい。その中から十二パーセント、一〇八三点に絞らなければいけない。審査の進行を務める理事が一番大変であるが、ほかの審査員も日展に相応しい作品を選出するのを目を凝らしている。私は、今回で四回目の外部審査員を務めることになったが、良い作品を見逃すことが無いように努めた。何回もの審査を重ねて入選、そして特選、大臣賞ほかを選出した。後日、会場に足を運んで、改めて日展の重要性を実感した。第五科だけでなく、一堂に現代アートを鑑賞できる環境の提示は、まさに日展ならではのことである。

前回の審査後にも述べたことであるが、審査員は弟子に対する情実はなく厳しい態度で臨んでおり、その良い作品を選ぶ姿勢を見ていると、審査員への弟子の指導は良い作品の制作に繋がることから認めても良いのではなからうか。



島谷 弘幸 (しまたに ひろゆき)

一九五三年岡山県生まれ。東京教育大学(現・筑波大学)教育学部芸術学科書専攻卒業。

東京国立博物館学芸部美術課書跡室長、資料課長、展示課長、文化財部長、学芸研究部長、副館長(兼)独立行政法人国立文化財機構本部研究調整役を経て、現在、国立文化財機構理事、九州国立博物館長。

文化功労者

森野泰明

日本芸術院会員・日展顧問



昭和九年二月八日京都府生まれ。昭和三十三年第三十三回日展初入選、同三十五年第三十三回日展特選・北斗賞、同四十一年第九回日展特選・北斗賞、平成十九年日本芸術院賞、同二十二年日本芸術院会員、令和元年旭日中綬章。

叙勲

令和三年十一月

旭日中綬章

日比野光鳳 (日展顧問)

第8回日展イベントレポート

※昨年の経験を活かし、感染対策をした上で、ガイドラインに沿って出来る普及事業から再開いたしました。

『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』

通常の半数以下の定員での開催となりましたが、毎回、たくさんの方が参加してくださいました。

『わくわくワークショップ』

二十年目を迎えた『わくわくワークショップ』。二年ぶりの開催となり、全六回(会期中の日曜日、午前・午後)で、定員を超える応募をいただきました。指導作家が子供達の為に考えたプログラムを体験し、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。この様子はHPでご覧いただけます。



『手紙を書こう!』

『わくわくワークショップ』の鑑賞カードから発展した、『手紙を書こう!』では、昨年の倍以上、四六五通のお手紙をいただきました。会場でお手紙を書くことが叶わなかった若い鑑賞者の感想や質問は、『手紙』になって、作家の元に届けられました。

※以下のイベントは中止いたしました。

『ミニ解説会』

『らくらく鑑賞会』

『グループ解説』— スクールプログラム —

大臣賞受賞作品制作意図

内閣総理大臣賞 第一科（日本画）

松崎 十朗「海へ」



激しい雨の後、海に続く砂地の道には荒々しい轍や水溜りがあり、視線の向こうには穏やかな海が広がっていました。
様々に表情を変えながら、遠い昔から変わらず存在している海の風景に強く惹かれて描きました。

内閣総理大臣賞 第二科（洋画）

北本 雅「DANCING」



黒人の若者たちが路上ダンスに興じる姿。しなやかな肢体の色や形の変化と連動を、リズムカルに表現したいと思って制作しました。
自身の作画に染み付いた常識から脱すべく、最後まで構図が動きましたが、彼らのリアリティや躍動感はまだ遠く、試行錯誤の最中です。

東京都知事賞受賞作品制作意図

東京都知事賞 第一科（日本画）

森 美樹「めづる」



コロナ禍の中、身近な虫や植物と接する生活から「堤中納言物語」内の短編の一つ「虫愛づる姫君」を想起した。幼い頃から心惹かれた物語の主人公は、宮廷夫人でありながら自然体で生き、本質を知ろうとする大切さを説く。
制作では意志の強さと慈愛を兼ね備える顔の表情に苦心した。

東京都知事賞 第二科（洋画）

大友 義博「木もれ陽の森で」



鹿の住む森に滞在する機会を得た。「鹿に会えた！こんなに近くにいた！」と目を輝かせる娘の話をもとに再構築した情景。自分も魅了された森の美しさと鹿たちの質朴さにふれた感動を織り込みたいと制作にあたった。
従来の構図から脱し、ダブルメインの構成にも挑戦した。

日展会員賞受賞作品制作意図

日展会員賞 第一科（日本画）

岩田 壮平「epoch '20-'21」



二〇二〇年から続く、新型コロナウイルスの蔓延で、明らかに全ての世情が一変してしまいました。日々見聞きする情報は目紛しく、何が真実で何れが虚偽か判り難い。全てがそのまま見えるとは限らないと思います。我々は如何に工夫を凝らし物事を見定めるべきか。考えに考えよ。きつとその先に幸せがあるはずだと、私は信じています。

日展会員賞 第二科（洋画）

福田あさ子「瞬く」



おがはな 大賀蓮の美しさと浪漫にひかれ、自宅の庭で蓮を育てている。蓮の花をデッサンしている時、私が描き終わるのを待つかの様に、花卉が一枚ヒラリと落ちた。生と死はほんの一秒の出来事だった。それからずっと命の循環に思いを馳せながら描いている。

文部科学大臣賞

第三科（彫刻）

工藤 潔「duet」



昨今、不可思議な現象が我々の日常に暗い影を落としている。中々爽やかな気分になれない。人と人が心から自由に語らい、唄い、触れ合える、そんな生き生きとした歓びに満ちた姿を二重唱で世界中に届けたい。との思いで表現した作品です。

文部科学大臣賞

第四科（工芸美術）

大樋 年雄「神の断崖2021」



昔、ネイティブアメリカンが居住地とした米国・コロラドにあるメッサベルデ。その頂から見た東西へと続く尊崇なる渓谷で、私は神の存在を知り、同時に自らの手によってその波動を陶土で表現することを誓った。手捻りを優先しながら、土がもつ自然からの歪なる変化を応用し、魂を込めて天への贈物とした。

文部科学大臣賞

第五科（書）

日比野博鳳「さくら」



今回は奇を衒わない古典的な散らし書きを目指しつつ、会場で見えるのかを考慮。紙の色、筆の大きさ、墨の色合い、余白の姿、行間の広さ、行の傾き、渴筆による線質の変化、そしてなにより文字と文字との「間」の取り方など留意する点は意外に多くありました。

東京都知事賞

第三科（彫刻）

堀 龍太郎「待つ」



作品にはありませんが、この男性像の前に小犬がいます。制作を始める前に一番悩みましたが、結局この春我家に迎えた小犬の姿に奮闘する自身の気持ちを男性像で表現しました。髭面、強面ですが口元に笑みを持たせました。愛犬への気持ちを表現出来たと思います。

東京都知事賞

第四科（工芸美術）

尾長 保「記憶の渚 飾皿」



海岸に住む私には渚の様々な感動の記憶がありますので、それをモチーフに制作を続けてきましたが、今回も地引網などの汀の人と魚の関わりの中での造形的な煌めきに惹かれ工芸らしい皿の形態にデザインしました。技法は新しい素材と研出蒔絵や平文などで自分なりの表現を試みました。

東京都知事賞

第五科（書）

植松 龍祥「王僧孺詩」



長条幅における行草体の表現方法、面白さなどを改めて考えました。重さと軽さ、文字の大きさをいかに組み合わせ表現するか、明末清初の古典を基とし、気を注入し、作品全体から醸し出す格調、充実感を出せるか苦心いたしました。

日展会員賞

第三科（彫刻）

植野 仁一「清晨」



すがすがしい明け方を爽やかな気持ちで迎えた様子を、穏やかな女性像で表現してみました。動きの少ない構成で、充足感をより強調することを目指しましたが、恒久の課題でもあります。これまで、周りの人に支えられてきたことへの感謝と新たな挑戦への意気も含めています。

日展会員賞

第四科（工芸美術）

田中 照一「煌めく」



夜明けの静かな水の流れに煌めく光の情景に感動して、幾何模様置き換えて表現しました。四角い平箱は赤銅板と銅板等を接ぎ合わせて、鍛金技法で成形して、彫金で模様を付け、金鍍金をして煮込着色にて、金属独特の黒色と赤色を発色させて、制作しました。

日展会員賞

第五科（書）

尾西 正成「珊瑚枝枝」



この度の栄誉、本当に有り難く身の引き締まる思いであります。書に真正面から取り組むことを約束とし、確かな用筆の中に不意な偶然が自然な魅力を与えてくれないかと欲張りしました。本賞が皆様からの叱咤、励ましと真摯に受け止め、更なる研鑽をと心新たにしております。

第八回日展 新入選者寄稿 ―喜びと抱負―



(日本画) 宇野 加奈子

今回の出品では、役目を終えてもなお、消費され尽くせない物の余韻をテーマに考えました。普段、喫煙することもあり、捨てられた煙草の箱に吸殻、灰皿にされた一斗缶や雨水による錆、飲みかけのコーヒー等が、私にとっては等身大の自分を素直に表現できる題材だと思いました。

この度の初入選を励みに今後の作品制作に取り組んでいきたいと思っています。

(日本画) HERATH MUDIYANSELAGE NILMINI

私はスリランカの芸術大学で学んだ後、日本の大学院に進学して日本画を勉強しています。

この度日展で入選できたことは大変嬉しく、今後の制作への大きなモチベーションになりました。これから日本とスリランカの自然環境に目を向けて、写生やドローイングを繰り返しながら来年の日展に向かって日本画制作を続けて行きたいと思っています。

(日本画) 渡辺 美弥

日本画から暫く離れており、この度七度目の出品で入選が叶い嬉しく思います。御指導いただきました先生方に感謝申し上げます。今作は、昔新聞記事で見た「母原病」の三文字に衝撃を受けた記憶から成り、啓発活動の一環として京都タワーが青くライトアップされる事を知り、当時の母親の懊悩を気象現象と蠢動する蛇の姿として制作いたしました。

日常の瑣末事にめげず少しずつ行ける所まで私なりに踏ん張って進んで行きたいと思っています。



(洋画) 小野 月世

どういう状況になっても絵から離れたくないと思い、子育てを並行しながらでも続けられる画材として水彩画制作をメインに活動していましたが、下の子が今年成人し、絵に向かえる時間が私にようやく与えられました。これを機にこれからはもっと活動の場や視野を広げ、自分自身の意思を表現できる場を持ち、また油彩を発表する場が欲しいと考えたとき「日展」が頭に浮かびました。自分にとって次の新しいステージに立てて幸いです。

(洋画) 菊地 泉

今回の作品は、人間の活動により環境破壊が進み、少女の先導によって罪のない生きもの達が破滅に向かって静かに行進する様子を描きました。自分には何が出来るのか考えてみたとき、この作品が生まれました。

幼少からの目標であった日展に展示され、とても勉強になり、大変感謝しております。自分の作品はまだまだ拙さばかりが目につきますが、もっと描きたい！勉強したい。もっともっと！と燃えています。

(洋画) 河野 育代

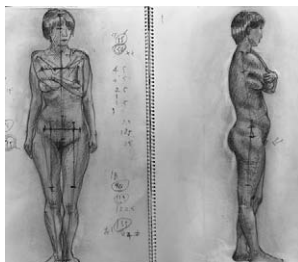
初入選の知らせは、喜びと共に、これから考えていく大きな機会になりました。ご指導くださった諸先生方、四十年以上にわたり、楽しく絵を描き続けて来られた環境に改めて、感謝致します。

作品は、「蹄鉄工房」の一隅で、この空間の言葉に表せない「生み出す力」に触発されました。黙々と作り続けていく。この「つくる喜び」を大切に、これからの他の作品の表現に刺激を受けながら、一作一作ひたすら励んで参りたいと思います。



(彫刻) 藤 本 美 空

この度、日展へ初めて挑戦し初入選をすることができ大変嬉しく思っております。作品の「安穩」は、制作するにあたり高校生から続けてきた彫刻に対して深く考えるきっかけとなりました。作品を通して私はどんなことを表現したいのか、あやふやだった自身の考えを改めて見つめ直すことができました。これからの制作に繋げていきたいと思っております。最後に、ご指導いただいた恩師や支えてくれた友人に感謝いたします。



(彫刻) 羽 室 陽 森

筑波大学の博士後期課程への進学を機に出品を決意した「第八回日展」において、入選し大変嬉しく思います。私は二〇一七年から一年間イタリアへ留学しました。以来、その時感じた彫刻への喜びを作品へ込められる様、制作に取り組んでおります。今回出品した《ターバンの中の女》は、静かなポーズの中にも堂々と立つ強さを表現すべく造形しました。まだまだ未熟者ですが、新たな出発として理想の彫刻美を追い求めていきたい所存です。



(彫刻) 加 藤 史 郎

大きな作品でないと入選できないと思っていたので、大変うれしいです。七十歳から木造彫刻を始めて四年目です。今回の作品は、彫刻で人の役に立つことが出来ないかと思ひ、イジメに遭って苦しんでいる人に、「自分は一人ではないのだ」との応援と励ましになればと思ひ、「Knock out bullying」(いじめをノックアウト)としました。イジメ対策でお役に立てて頂ければと思っております。



(工芸美術) 本 間 浩 一

この度は第八回日展におきまして初入選を大変嬉しく思います。入選作品は「動」をテーマに水の流れや竹の生み出す曲線美を拙いながら表現しました。生きていくような、動き出しそうな、流動的な美しさを意識して制作しています。技術力も美的感覚もまだまだ未熟ではありますが、竹という素材の美しさを活かした作品が制作できるように励んで参ります。



(工芸美術) 伏 木 和 子

私の住む栃木は豊かな資源に恵まれ、地球の贈り物である土で自然の美しさや生命力を表現する作品を制作しております。今回の作品は力強い動きのある作品にとの思いから土を重ね合わせました。腰を屈めての窯入れは重労働ですが、願いを込めて火入れしています。気が付けば二十年以上の歳月でした。初入選は、私を支えてくれた人達の喜びでもありました。先生方との出会いに感謝申し上げます。



(工芸美術) 井 原 香 織

私自身「形有るものは全て壊れるけれど、感動したものはずっと心に残る」とその様な作品を長年手掛けて来ました。現在、このコロナ禍の中、少しでも心癒して頂ければとの思いからの制作した作品が初入選し、これからは本番のスタートだと思っております。益々、自分自身を磨き、形だけではなく心に残る作品を手掛け続けて行きたいと思っております。



(書) 小池 功逸



(書) 小林 劉苑



私にとって日展は、学びを深める機会を頂いている場所です。その日展で初入選の吉報、まさか私が…。喜ぶ間も無く「まだまだ、これから」とドンと背中を押された感じです。作品制作に当たり、自分に足りないものを学ぶために今の古典に至りました。更に更に基礎をしつかり積み重ね精進していきたいと思えます。最後ではありますが、共に研鑽に励んでいる方々、そして家族に感謝しております。

(書) 関 獎人

この度の初入選は、二十年以上に渡ってご指導頂いた恩師や先輩の先生方のご指導のお陰であり、感謝に堪えません。この作品の展開する文字の構成は、含蓄ある味わいを様々な古典から取り入れ、文字どうしの響きあいや余韻を生かし制作しました。日々の教員生活において研修に打ち込む生徒の真摯な姿勢に励まされ、制作活動を家族が後押ししてくれました。これからが大事です。この気持ちを忘れず精進します。



(書) 建 林 佐智子

毎年書友の方々と日展にご一緒し、展示されているすばらしい作品を鑑賞するのを楽しみにしていました。その会場に自分の作品が展示されるとは夢の様でした。今回は、仮名らしいたおやかな線と情景が浮かんでくる様な書を目指して書き込みました。まだまだ未熟で課題も山積みですがこの入選を励みにこれからも日々精進してまいりたいと思っています。



(書) 永田 瞬

今回の日展に出品するにあたり、白文は金文、朱文は甲骨文を用いた。朱文は多字数にしたため字形の選定や配置などに苦勞してできた作品である。私の篆刻作品における表現は、先生方に恵まれ、様々な出会いによって形成されたものである。そのエッセンスを十分に吸収し、古典を尊重すると同時に書における知識や技術を深め高めていき、自力をさらにつけ、生き生きとした作品を制作していきたい。

(書) 原 夢華



制作にあたり、作品は墨のボリュームと、かすれ部分の濃淡の表現を特に意識して取り組みました。なかなか思ったようにはいかず試行錯誤の日々でしたが、今の自分が出来ることを精一杯詰め込み何とか書き上げることが出来ました。課題点もたくさんありますが、これからもいたいたご縁と恵まれた環境に感謝し、より一層精進して参りたいと思います。

第8回日展 入場者数（国立新美術館）

| 月 日 | 曜日 | 天 候 | 入場者数(人) | 月 日 | 曜日 | 天 候 | 入場者数(人) | 月 日 | 曜日 | 天 候 | 入場者数(人) |
|-------|-----|------|---------|-------|----|-------------|---------|---|----|------|---------|
| 10/28 | 木 | 晴 | 617 | 11/6 | 土 | 晴 | 2,751 | 11/15 | 月 | 晴 | 3,301 |
| 10/29 | 金 | 晴 | 3,934 | 11/7 | 日 | 晴 | 2,997 | 11/16 | 火 | | 休館日 |
| 10/30 | 土 | 晴 | 2,465 | 11/8 | 月 | 曇時々晴 一時雨 | 2,340 | 11/17 | 水 | 晴 | 3,639 |
| 10/31 | 日 | 曇時々雨 | 2,030 | 11/9 | 火 | | 休館日 | 11/18 | 木 | 曇時々晴 | 3,442 |
| 11/1 | 月 | 曇 | 1,632 | 11/10 | 水 | 晴 | 3,002 | 11/19 | 金 | 曇時々晴 | 3,348 |
| 11/2 | 火 | | 休館日 | 11/11 | 木 | 晴 | 3,551 | 11/20 | 土 | 晴 | 4,711 |
| 11/3 | 水・祝 | 晴 | 3,559 | 11/12 | 金 | 晴 | 3,459 | 11/21 | 日 | 曇 | 5,163 |
| 11/4 | 木 | 晴 | 2,614 | 11/13 | 土 | 晴 | 4,105 | 入場者数69,201名（平均3,146名） ※10/28は会員、準会員及び今回展特選受賞者 限定の出陳者内覧会 | | | |
| 11/5 | 金 | 晴 | 2,160 | 11/14 | 日 | 晴 | 4,381 | | | | |

第8回日展 応募点数及び陳列点数

（新入選数は入選数に含む）

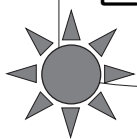
| | 日 本 画 | 洋 画 | 彫 刻 | 工芸美術 | 書 | 合 計 |
|-------------------|--------------|-----------------|-------------|---------------|-----------------|-----------------|
| 応 募 点 数 (前年度比) | 351 (- 1) | 1,604 (- 59) | 88 (+ 1) | 612 (- 33) | 8,518 (+ 87) | 11,173 (- 5) |
| 入 選 点 数 (新入選数) | 151 (12) | 625 (67) | 64 (3) | 443 (34) | 1,083 (209) | 2,366 (325) |
| 無鑑査点数 | 131 | 120 | 153 | 126 | 141 | 671 |
| 陳 列 点 数 | 282 | 745 | 217 | 569 | 1,224 | 3,037 |

第8回日展巡回展（予定）

会期は変更することがあります

| 開催順 | 開催地 | 会 期 | 会 場 | 開 催 者 |
|-----|-----|--------------------|-------------------|-------------------------------|
| | 東 京 | 2021年10月29日～11月21日 | 国 立 新 美 術 館 | 公益社団法人 日 展 |
| 1 | 京 都 | 12月18日～2022年1月15日 | 京 都 市 京 セ ラ 美 術 館 | 日展京都展実行委員会 |
| 2 | 名古屋 | 2022年1月26日～2月13日 | 愛知県美術館ギャラリー | 中 部 日 展 会 |
| 3 | 大 阪 | 2月26日～3月21日 | 大 阪 市 立 美 術 館 | 日展大阪展実行委員会 |
| 4 | 安曇野 | 4月23日～5月15日 | 安曇野市豊科近代美術館 | 安曇野市豊科近代美術館 公益財団法人 安曇野文化財団 |
| 5 | 金 沢 | 5月28日～6月19日 | 石 川 県 立 美 術 館 | 北 國 新 聞 社 |

教えて、作家さん！
わくわくワークショップ
「手紙を書こう！」



「わくわくワークショップ『手紙を書こう!』という、小・中・高校生から気に入った作品の感想や質問をあつめる企画を実施しました。手紙は昨年の倍以上の465通にも及びました。そのため、皆様から好評をいただいておりますこの企画も2回に分けてお届けします。

目がとてもリアル。ねこの毛が1本1本描いてある。金魚がリアル。今にも飛び出てきそう。ほしい！
将来絵に関する仕事をしたいです。何色がこの絵に使ったんですか？どうしてこの絵をかこうと思ったんですか？清子さんにとって、絵とはなんですか？

美雲さん9歳

作品に使用した色ですが、墨の色（黒）、白、黄土、朱色、緑、青などいろいろな色を使っています。私にとって絵とは自分の大切なものを表現できる場所です。一緒に暮らしている猫をととても愛していて、その子が楽しく幸せでいられる世界を作品の中で表現していきたいと思っています。将来、絵に関するお仕事がしたいのですね。やりたい事が明確にあるのは素敵な事です。頑張ってくださいね。

石井清子



遊ぼう

入ったしゅんかんに、一番に目につきました。どうやってつくったのか気になりました。はじまりって作品名にあるので赤ちゃんだと思うんですけど、自分には甥っ子がいて、寝ている時の顔があんなだったのを思い出しました。
はじまりのモニュメント面白かったです。次回も楽しみにしています。

梨さん11歳

さいしょ、ねん土でつくり、型をとって石膏をながしこんでつくりました。じつは、中は空どうで、光がすけるくらいすくつくってあります。甥っ子さんをだいじになさっているのですね。私にも小さな赤ちゃんがいます。この作品のモデルになってもらいました。その子が、私のおなかにいるとき私がねむくても、とてもよくうごくので、私とはぜんぜんちがう人だとはっきりわかりました。私は、だれでもあり、だれでもない、「人間そのもの」がつくりたいとかがえています。だれでも、この世界にうまれたときから「自分」をもっていることをほこらしく表現するための『はじまりのモニュメント』でした。だから、あなたのためのモニュメントにもなれたらうれしいです。モニュメント=きねんひ

田原迫 華



はじまりのモニュメント

はくりょくがあっていいと思います。
字がくっきりしていました。
すごいです。

紗希さん9歳

私は3歳から書道を始めて44年間、好きな事（書道）を仕事にできた幸せな作家です。作品は、中国の殷周時代（今から3000年くらい前）の文字を使い、デザインを考えながら約5ヵ月間1300枚くらい書いた中の1点です。『感じる書』をテーマに制作しましたので、皆さんからの「迫力」、「くっきり」などの感想がとてもうれしく、たくさんの元気をもらいました。本当にありがとうございます。これからも日本の伝統文化である書道にもっと興味を持ってもらい、多くの美術館や博物館へ通って皆さんがすばらしいと思える芸術作品に出会えることを心より願っております。

鹿倉碩齋



多聞

最初にみた時に、写真かと思いました。船や家も立体的ですごかったです。池にうつった雲や木は、ぼやーっとしていて、きれいでした。でも、地上はとてもはっきりとかいていたので、池と地上のメリハリがついていて、本物みたいにみえました。どうやったら、あんなにはっきりした絵をかけるのか、教えてください。また見に来るので、頑張ってください。

さゆさん10歳



Rye-River Rother

写真みたいに見えたこと、メリハリを感じてくれたこと、すごいですね。私は小さい頃から絵が好きで、ずっと描いてきました。そしたら少しずつ上手になってきました。好きなことを続けて下さいね。では、また見に来て下さい。

西房浩二

透明感が美しく、中のあわなどがとても印象的でした。色々の角度から見たら、もようが変わる様な気がして、すごい作品でした。この作品はどうやって作ったんですか。このあわはどうやって作品の中に入れたんですか。これはどの段階でほったんですか。色はどうやってつけたんですか。

翔大さん12歳



碧流

興味を持ってもらった作り方ですが、色ガラスのかたまりをステンレスの先に付けて、何色かませます。これに1000℃以上で溶けたガラスを被せて、息を吹き込んでふくらませます。これを繰り返して、大きくして、吹きガラス技法で器を作ります。器の外側を耐火のセメントで固めて、その中に溶けたガラスを流し込みます。あわは、流し込む時に自然に入ります。彫り込みは、ガラスが冷めてからダイヤモンドの付いた丸いのこぎり、で、切り込んで行きます。

細井基夫

●個人

青木晃子様 東 晋一郎様
新井演子様 飯田真未様
石崎國夫様 井谷善恵様
井上道守様 今田功一様
今村忠司様 岩田 薫様
奥田節子様 角井 博様
梶山純子様 金子美和様
兼重勇希様 岸野 田様
栗原直子様 呉 祐輔様
黒田浩平様 児玉安司様
近藤禎男様 坂本美賀子様
佐川かおる様 澤田優也様
島谷弘幸様 鈴木千壽様
高木京子様 高木寛史様
田頭明子様 田頭益美様
高橋千笑様 竹尾明子様
竹本葉子様 谷本佳美様
土橋正彦様 土屋礼央様
寺岡宏高様 中谷幸司様
中原有三様 西田俊通様
西村潤焔様 西村友子様
野田裕一様 藤田理恵子様
藤本真之様 堀 稲子様
松岡庸子様 宮島幸男様
宮原和朗様 村里 暁様
森寫順子様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
医療法人社団 永寿会様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 川端商会様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
株式会社 靖雅堂夏目美術店様
公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 筑波銀行様
T&T パートナーズ法律事務所様
東洋額装 株式会社様
公益社団法人 日本書芸院様
一般財団法人 ビオトピア財団様
福井素鳳堂様
株式会社 便利堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
株式会社 ミライト・テクノロジー様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
株式会社 湯山春峰堂様
菱三印刷 株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

委員会委員補充

令和三年一〇月二八日開催の理事会において、左記委員会委員が補充された。

日展運営委員会

工芸美術 春山文典

表紙

右上 内閣総理大臣賞

松崎十朗「海へ」

左上 内閣総理大臣賞

北本雅「DANCING」

右下 文部科学大臣賞

工藤 潔「duet」

左中 文部科学大臣賞

大樋年雄「神の断崖2021」

左下 文部科学大臣賞

日比野博鳳「さくら」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

伊藤 萌木先生(工芸美術・賞) 3・6・25

津金 孝邦先生(書・会員) 3・9・20

柴田 祐作先生(洋画・会員) 3・12・6

大西きくゑ先生(書・会員) 3・12・8

大塩 正義先生(工芸美術・賞) 4・1・6

榎倉 香邨先生(書・会員) 4・1・21

編集後記

全世界的なコロナ禍の中、日展は感染者減少の時に、無事に開催する事が出来ました。

大臣賞はじめ各賞に輝いた方々、特選受賞者に祝意を表します。

外部審査員の先生方から、審査を終えてのご寄稿を頂戴致しました。また新入選者の方々からも喜びに溢れる寄稿が届きました。

理事長、事務局長、各科の審査主任の先生方の座談会では、各科それぞれの考えで公明正大な審査の進行が行われ、特選の選出の際にはとても神経を使われた事と感じ入りました。各科の陳列においても一点一点の作品が影響しあつて、会場全体がより美しく見える様に工夫をなされたご苦勞に感謝申し上げます。

今後の日展を盛り上げるために、SNSの活用は、大事な時代に入つたと思います。

新型コロナウイルスの変異株である「オミクロン株」が、急速に広がっておりますので、自愛ください。

(月岡)

編集委員 川田 恭子 水野 収

清水 優 前原 喜好

堤 直美 野原 昌代

月岡 裕二 友定 聖雄

西村 東軒 福光 幽石